

解表剤

解表剤は発汗・発散の効能によって、体表の邪気を体外へ追い出す方剤である。

表証とは外界の邪気が口・鼻・皮毛を通じて人体表部に侵入した時、これに対して正気が抵抗しようとする病証である。解表剤は辛味をもち、邪を発散させる働きがある。体表の病邪は直ちに解除しなければ、体内に入り込み、病状が重くなり、治療も難しくなるので、時期を失わずに解決することが大切である。

解表剤の発散・発汗作用は、発疹の初期、浮腫みの初期にも利用することができる。

解表剤を服用した後は風邪を避け、少し発汗する方がよい。

解表剤の分類

1 辛温解表剤

風寒の邪気を感じた表証に用いる。

代表症状：強い悪寒、軽い発熱、汗が出ないあるいは少ない、口渴なし、舌苔薄白、脈浮緊。

辛味で風邪を発散し、温性で寒邪を散らす。

性質が温に偏り人体の津液を損傷しやすいため、熱証には不適當である。

方 剤：麻黄湯・桂枝湯・葛根湯・葛根加川芎辛夷湯・十味敗毒湯

2 辛涼解表剤

風熱の邪気を感じた表証に用いる。

代表症状：高熱、軽い悪寒、発汗、口渴、舌尖紅、舌苔薄黄、脈浮数。

辛味で発散し、涼性で清熱する。

性質は涼に偏るので、風寒の邪を感じた表証には不適當である。

方 剤：銀翹散・麻杏甘石湯・五虎湯・升麻葛根湯

3 化湿解表剤

風湿の邪気を感じた表証に用いる。

代表症状：悪寒、発熱、頭・身体が重い、悪心あるいは下痢、舌苔白、脈濡。

辛味で発散し、芳香性で湿邪をとる。

方 剤：藿香正気散（勝湿顆粒）・香蘇散

4 扶正解表剤

素体虚弱の者が外邪の侵入を受けた表証に用いる。

代表症状：平素に虚弱（気・血・陰・陽の虚弱）症状がみられる、悪寒、発熱、舌質淡、苔薄白、脈弱。

辛味で邪気を発散しながら、体内の正気を助ける。

辛味で邪気を発散しながら、体内の正気を助ける。

方 剤：参蘇飲・麻黄附子細辛湯

麻黄湯 (まおうとう)

傷寒論

組 成	麻黄 6 桂枝 4 杏仁 6 炙甘草 3
効 能	辛温解表・発汗散寒*・宣肺平喘*
主 治	外感風寒（表実証）・肺気不宣*

*発汗散寒：外感風寒証に使われる治療原則の一つ。発汗法によって体表に侵入している風寒の邪気を体外に追い払う治法である。汗のでない表実証に用い、体表が虚して汗の出る者に用いてはならない。

*宣肺平喘：肺の宣発機能を調節して肺気の流通をよくし、喘息・咳など肺の症状に対する治法である。

*肺気不宣：肺気の宣発機能が侵入してきた外邪に塞がれて失調した状態を示す。

●解 説

本方剤は風寒の邪が外から侵入したためにおこる太陽病傷寒証に用いる処方である。発熱、悪寒、無汗といった表実証、および初期の咳、軽い喘息など肺の症状に用いる。

太陽病は、太陽傷寒と太陽中風の2つに区分される。

太陽傷寒（表実証）——主に寒邪を外感しておこる病証。肌表の腠理は閉じ、無汗である。麻黄湯を用いる。

太陽中風（表虚証）——主に風邪を外感しておこる病証。肌表の腠理（汗腺）が粗くなって汗が出る。桂枝湯を用いる。

●適応症状

◇悪寒・発熱——風寒の邪気を感じた直後に現れる表証の代表的な症状である。寒邪のもつ「凝滞・収引」の性質によって体表が閉じ、陽気（衛気）が体表に到達して温煦できないため、強い悪寒が現れる。発熱は病邪と正気（主に抵抗力）の激しい争いによって現れる。体表を襲った邪気が寒邪である場合は、悪寒の症状が発熱にくらべ顕著である。発熱は体温計の測定結果より自覚症状を重視する。

◇頭痛・身痛——寒は痛を主る。寒邪が体内に侵入したため気血の流れが悪くなり、痛みが生じる。外邪は上部から侵入してくるので、頭痛が顕著に現れる。

◇無汗——寒は収引（収縮）を主る。寒邪が体表に滞ると、腠理は収縮して閉ざされ、汗が出なくなる。表実証を示す重要な症状である。

◇咳・喘息——肺は皮毛を主る。風寒の外邪が侵入して、皮毛や腠理を通して肺の宣発・肃降の機能が失調すると喘息が現れる。肺に入り込んだ邪気を追い払おうとして肺気が上逆し、咳が現れる。

◇舌苔薄白——薄苔は病邪の侵入が深くないことを示し、白苔は邪気の性質が寒であることを示す。

◇脈浮緊——体内の気血が邪気と闘うため、体表に向かって浮き上がってくる浮脈がみられ

る。寒邪が滞って収縮するので、緊脈が現れる。

●処方分析

桂枝	散寒	┌	発汗・散寒・解表（表）
麻黄	宣肺平喘		
杏仁	降肺止咳	└	宣降肺气（肺）
炙甘草			
			麻黄、桂枝の薬性（辛散）を緩和・諸薬の調和

麻黄は辛温解表薬の首座にあり、表と肺に強く作用する。その辛味によって発汗し、温性によって散寒する。とくに発汗作用が強く、邪気を汗とともに体外に排除する。外感風寒の表実証に適した生薬である。桂枝も辛温解表薬である。麻黄にくらべ発汗作用は劣るが、温経通脈（体表の気血の流れをよくする）の効能がある。麻黄と配薬することによって発汗作用が増強される。杏仁は止咳平喘薬である。種子は重い性質があり上逆する肺気を下降させる。麻黄の宣発作用と、杏仁の肅降作用で（一宣一肅）肺気の流通をよくし、咳・喘息を治療する。炙甘草は蜜の甘味があり、麻黄、桂枝の発散性を和らげ、また、発汗過多による正気の消耗を防ぐ。

●臨床応用

◇感冒——悪寒、発熱、無汗、口渇がないなど外感風寒の表実証に適する。服用した後、汗が出て症状が改善されたら服用を止める。発汗後も症状が改善しないときは、発汗しすぎないようにするため「桂枝湯」に変方する。

◇喘息・気管支炎——平喘止咳作用のある麻黄、杏仁が配合されているので、初期の咳嗽、喘息を中心とする肺の症状に適している。感冒の症状がみられなくても使用してよい。

咳嗽がひどいとき + 「参蘇飲」（宣肺・止咳・化痰）

または + 前胡，白前，貝母（止咳）

痰の多いとき + 「二陳湯」（化痰）

喘息がひどいとき + 「小青竜湯」（散寒・化飲・止喘）

または + 紫蘇子・桑白皮（平喘）

痰が黄色いとき + 「竹茹温胆湯」（清熱化痰）

または + 黄芩，石膏（清熱化痰）

◇急性腎炎——本方は解表剤であるが、麻黄の利尿作用は浮腫の初期に効能がある。特に小児の急性腎炎に表証をとまなう場合は、麻黄湯本来の発汗解表作用によって表証を治療しながら水邪を体外に排出できる。これは提壺揭蓋法（壺の蓋を開けて、中の水を勢いよく排出させる）と呼ばれる。臨床では、白朮を加味した「麻黄加白朮湯」を用いることが多い。

浮腫などがひどいとき + 「五苓散」（通陽利尿）

●注意事項

①本方は発汗作用が強いため、外感風寒の表実証に適しているが、汗の出が多い表虚証、体質虚弱の表証、産後の表証に用いてはならない。

②本方は解表剤であるため、長期に服用してはならない。

③本方を服用後は、布団を掛け、温かいものを摂り発汗を促すようにする。

桂枝湯 (けいしとう)

傷寒論

組成	桂枝 9 白芍薬 9 生姜 9 大棗 9 炙甘草 6
効能	解肌發表*・調和営衛*
主治	外感風寒（表虚証）・営衛不和*

*解肌發表：腠理がゆるんだため、表よりやや深部の筋肉に入った邪気を追い払う治法である。發表は体表の邪を発散させることで、解表とほぼ同意義であるが、解表より若干力が弱い。

*調和営衛：衛気と営気の失調を調和させ、体表の邪を除去する治法である。穏やかな調和法で、強い発汗解表法が適しない表虚証に用いる。

*営衛不和：衛は体表を防衛する衛気（陽）で、皮膚を温養し、汗腺を開閉することによって寒温を調節する作用がある。営は脈管内を流れる精気（陰）で、体内を護り全身を栄養し、汗の源となる。営衛不和とは、営気と衛気の不均衡状態をいい、衛と営の関係によって「衛強営弱」と「衛弱営強」の2つに分けられる。

衛強営弱：「衛強」とは肌表に侵入した風寒の邪気に対抗して、衛気が体表に集中している状態をいう。正常時、衛気は腠理の開閉を管理し、発汗を調節し、汗の源である営気を保護している。しかし、侵入してきた風寒の邪気と衛気が抗争するときは、相対的に衛気が強くなる状態を「衛強」という。これに対し腠理が固まらず、肌表があらくなるため、営気は内を守っていることができず外に漏れ出てしまう状態を「営弱」という。「桂枝湯」の治療対象となるのは「衛強営弱」である。「衛弱営強」は主として平素から気虚である人で、自汗の症状がみられるが、表邪は存在しない。

●解説

本方剤は太陽病中風証に用いる主方である。太陽病は傷寒証と中風証に分類され、桂枝湯は表虚証の人が外から風寒の邪気を受けた場合に適する方剤で、表実証には適していない。（麻黄湯を参照）

●適応症状

◇発熱——表証を代表する症状の1つである。陽に属する衛気が、体表に侵入した風寒の邪気と争うために現れる症状である。

◇悪風——体表を防衛する衛気が邪気との抗争に力をとられ、腠理がゆるんでしまい、風の侵入を防ぎきれなくなって、悪風の症状が出る。悪風は悪寒よりやや程度が軽い。

風にあたると寒けがし、風がなければ寒けがしない場合を悪風といい、室内にいて風にあたらなくても寒けがする場合を悪寒という。

- ◇頭痛——衛気と邪気の闘争によって、経気めぐりが悪くなり、痛みがおこる（不通則痛）。風邪は陽邪で上から侵入するため、頭痛が多くみられる。
- ◇自汗——昼間に汗が出やすい状態を示し、表虚証の主症状の1つである。皮膚の腠理がゆるむと、汗の源である営気（営陰）は内を護ることができずひとりてに外へ洩れ出てしまう。
- ◇舌苔薄白——舌苔薄は発症初期に現れ、舌苔白は病邪の性質が寒であることを示す。
- ◇脈浮緩——浮脈は表証を代表する脈象である。表が虚して汗が出ると、脈管内の営気が弱くなり、脈は緩慢となる。（緩脈は「麻黄湯」の緊脈に対していうものである）

●処方分析

桂枝	———	解肌発汗・温経通陽	〔散・陽〕
白芍薬	———	和営斂陰	〔収・陰〕
生姜	———	桂枝の解肌発汗作用を補佐	
大棗	———	芍薬の和営養陰作用を補佐	
炙甘草	———	諸薬の調和・芍薬とともに陰津を保護する	

桂枝は辛温解表薬であるが、麻黄より発汗作用が弱く、表虚の汗出症状を悪化させることなく表邪を取り除く。しかし、用いすぎれば、発散過多となり営陰を損傷するおそれがあるため、白芍を配合して陰を保護する。白芍薬の収斂作用は、桂枝の辛散による正気の損傷を抑え、桂枝の辛散は、芍薬の酸収による邪気の封じ込めを防ぐ。両薬で一散一収して、衛気と営陰を調和し、「扶正去邪」の方剤となる。生姜も辛温解表薬で、桂枝の解肌発汗作用を増強し、衛気に作用する。大棗は甘味をもち、白芍薬の和営斂陰作用を助ける。炙甘草は生甘草にくらべ補益作用が強く、芍薬の酸味と甘草の甘味によって、津液を生むことができる（酸甘化陰）。

●臨床応用

- ◇感冒——発熱、自汗、悪風を主症状とする感冒に適している。普段からも汗をかきやすい虚弱体質者に用いる。
- ◇産後の発熱——産後や月経期間中は、出血によって気血両虚となり、衛陽が不足するため、外邪の侵入を受けやすくなる。感冒でなくても産後の発熱・多汗の症状にも用いられる。高熱の場合には辛温解表剤を投与してはならない。
- ◇アレルギー性鼻炎——突然透明の鼻水が多く出て、くしゃみする外感風寒の症状に用いる。特にアレルギー症状が出る前に、「桂枝湯」によって営衛を調和し、体表の抵抗力を増加して予防をはかることもできる。
 - 鼻づまりの症状がひどいとき + 「葛根湯加川芎辛夷」（宣肺開竅）
または + 辛夷、蒼耳子、白芷（開竅）
 - 鼻水が多いとき + 「小青竜湯」（解表化飲）

◇痺証——桂枝の散寒・温経通脈作用、芍薬の柔筋止痛作用を用いて、風寒湿痺による関節痛・筋肉痛に用いることができる。解表作用があるので痺証の初期に用いることが多い。

痛みがひどいとき + 「桂枝加朮附湯」（散寒・通絡・止痛）
または + 威靈仙、羌活、独活（去風・除湿・散寒）

◇皮膚疾患——風寒の侵入によって、営衛不和、血脈不通となったしもやけ、湿疹、皮膚癢痒症、寒冷蕁麻疹などの皮膚症状に用いる。本方は体表の営衛（陰陽）を調和し、経脈を通じさせ、根本を治療する。

痒みがひどいとき + 「十味敗毒湯」（去風・散寒止痛）
皮膚が赤く熱感があるなど、熱症状が顕著なときは用いてはならない。

◇寒性の腹痛——本方の芍薬を倍量にして飴糖を加えれば「小建中湯」の組成となり、脾陽不振、寒邪内停による腹痛を治療できる。桂枝と生姜が陽を温め寒邪を追い払い、芍薬と甘草が養血し拘急状態を緩げる。特に外感風寒の感冒症状をともなう腹痛に適する。

●注意事項

- ①「桂枝湯」を服用した後は、少量のお粥を食べて、布団を掛け、微汗をかかせる。これを「薬汗」といい、やや熱感をもたせ、邪気を汗とともに、体外に排除できるようにする。「桂枝湯」を服用した後、微汗が出て、外感症状がなくなったら、服用をすぐ止める。（表証に現れる汗は病的症状で冷感をともなう。「病汗」という。）
- ②傷寒論の原文には「桂枝湯」の禁忌として生冷（生物、冷たい物は胃を損傷する）、粘滑（粘りのあるものは邪気を留める）、肉麵（肉、小麦粉は熱を助長する）、五辛（香辛料が強い辛い物は熱を助長する）、酒酪（酒、乳製品などは湿熱を生み出す）、臭悪（特殊な匂いと味をもつ食べ物は脾胃を傷める）などがある。

葛根湯

（かっこんとう）

傷寒論

組成	葛根12 麻黄9 桂枝6 芍薬6 生姜9 炙甘草6 大棗9
効能	辛温解表・発汗・舒筋
主治	外感風寒・項背部のこわばり

●解説

本方剤は太陽病表実証の兼証にある処方で、外感風寒による悪風・頭痛・無汗、および太陽膀胱経の経気の流れが滞ることによって生じる項背部のこわばりを治療目標とする。